様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１０日現在

機関番号：３２６２７
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：２０１０～２０１２
課題番号：２２６５２０３１
研究課題名（和文）　フランス古典演劇のレパートリー化プロジェクト
研究課題名（英文）“French classical drama in Japanese theater repertoire” project

研究代表者
酒井　三喜（SAKAI, Mitsuyoshi）
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号：70205714

研究成果の概要（和文）：本研究は、17、18世紀のフランス古典演劇を日本演劇（劇団や演劇部）のレパートリーとして導入・定着させるためにはなにが必要か、なにがその導入・定着を妨げる要因となりうるかを解明するとともに、必要なものを提供し、また必要な環境を整えることで「フランス古典演劇のレパートリー化プロジェクト」を構築することを目指している。この3年間で「プロジェクト」の障害となりうる諸問題を調査・研究し成果を得たが、研究成果の概要は主に次の通りである。○18世紀フランスの喜劇作家マリヴォーの喜劇『コロニー』（*La Colonie*）、『恋のサプライズ2』（*La Seconde surprise de l'amour*）の“現代語”翻訳台本を制作し、インターネット上に掲載した。○現代の演劇実践に適応した新たな古典劇翻訳メソッドを構築した。○勉強会やワークショップを通して、日本の演劇人や高校・大学生を対象に“現代語訳”フランス古典劇の普及活動を行った。○フランス古典演劇の現状を調査・研究し、「プロジェクト」構築の参考となる成果を得た。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is to know how to introduce French classical drama of 17th and 18th centuries in Japanese theater (theater companies and school drama clubs) and to know also what could be the factors that will prevent smooth introduction of French classical drama in Japanese theater. This research aims to build “French classical drama in Japanese theater repertoire” project, by providing what is necessary for the project and creating an environment favorable to the project. We have got from our research satisfactory results as follows, in summary.
We translated in contemporary Japanese 2 comedies of Marivaux, 18th century French comedy writer, *la Colonie* and *la Seconde surprise de l'amour*. We put these translations on Internet in order that any Japanese would have access freely and easily to French classical drama. We built a new classical drama translation method adapted to the practice of contemporary Japanese theater. We organized group studies and workshops with theater people, schoolgirls and college students using our translation, and carried out promotional activities of our “new type translation” of French classical drama. We researched the current status of French classical drama in Paris, and obtained a result that will be helpful in our future Project.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010年度	500,000	0	500,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,500,000	300,000	1,800,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学
キーワード：仏文学、仏語、芸術諸学、演劇

1．研究開始当初の背景

○日本の若い世代の演劇実践（いわゆる小劇場活動や高校・大学の演劇部等による演劇活動）において、フランス古典演劇が上演されることはきわめてまれであり、シェイクスピアやチェーホフの一部の劇作品のように、演劇レパートリーの演目としてある程度繰り返し上演されるものは、フランス古典劇の分野では皆無と言ってよい状況が存在していた。「小劇場」においては、そもそも「レパートリー演劇」というシステム自体が実践として定着しておらず、オリジナル新作台本による公演が大部分を占めている。オリジナル台本演劇にも優れたものはあるが、それ以外の演劇領域が演劇実践において事実上閉じられているという現状は、古典演劇の豊穣さを思うとき、演劇実践というレベルでも、若い演劇人の育成というレベルでも、日本演劇にとって大きな損失であると思われた。自分たちの知っている世界（たとえば「現代日本」というようなラベルでまとめられるような）をもっぱら演劇創造のベースとするオリジナル台本偏重の演劇は、若い世代の演劇が真に多様であることをさまたげている。演ずるたびに、見るたびに、読むたびに、未知なる深い“人間真理”へと導いてくれる古典演劇（悲劇、喜劇）を“日常的”な演劇レパートリーに取り入れること、また演劇人の育成プログラムに導入することは、日本演劇の多様化・活性化に貢献するに違いない。日本の伝統演劇が専門的エリートに独占されているとすれば、フランス古典演劇翻訳をアクセスしやすいフレンドリーな形で若者たちに提供できないか、いや提供すべきではないかと思われた。しかし、一方で、フランス古典演劇の多くが翻訳戯曲として図書館に所蔵され簡単に閲覧することができることを考えれば、古典翻訳のあり方それ自体を見直す必要があるのではないかという予想もできた。翻訳戯曲と日本の演劇人との間にある大きな隔たりは、そこに解決すべき問題のあることを示唆していた。
○演劇実践の問題は日本の翻訳実践の問題と密接な関係がある。図書館に所蔵されている翻訳戯曲はその多くが“学術的”な翻訳であり、上演を必ずしも想定していない。文字の領域で“正確な意味”を翻訳することに専念する“学術的”翻訳は、いわば読み物としての翻訳であり、これを台本として演劇上演を行うことは事実上不可能である。演劇実践という新たな視点から、小劇団活動、青少年の演劇活動を理解した上での、“新しい” 古典演劇翻訳を生み出す必要性が強く感じられた。
○演劇研究者・翻訳者と演劇人との親密な交流・意見交換・情報交換の必要性も感じられた。翻訳者が、その翻訳の過程で、現実の芝居がどのように生まれ生成していくかということについての実体験をレフェランスとして自らのうちに持つことができれば、その翻訳の質は大きく変化する。一方、こうした交流は、演劇人の側にある「古典は難しい」という思い込みを取り除き、古典を演劇の新たな可能性とみなすより自由な姿勢を彼らのうちに生み出し得ると思われた。日本で演劇にかかわる多くの若者たちは、フランスにおいて古典劇がいかに革新的で創造的な演劇であり得るのかということを知らないし、想像する手がかりさえ持っていない。情報や知識の遮断が若い演劇人を狭い可能性の中に閉じ込めている。日本で行われるすぐれた海外公演は数少ないし、入場料は安くはない。簡単にアクセスできる映像アーカイブのようなものもない。演劇研究者・翻訳者は彼らにできるだけ多くの情報と知識を伝えることで、古典劇の面白さに気づいてもらう必要があった。

2. 研究の目的

○日本の演劇実践の中にフランス古典演劇をレパートリーとして定着させることを目的としたプロジェクトを構築する。
○プロジェクトの障害となり得るさまざまな問題を調査・研究し、その解決の可能性を探る。
○現代の演劇実践に見合った古典演劇の翻訳メソッドの研究をし、またそれによる翻訳を実践する。○演劇実践者（小劇場、高校・大学演劇部など）に新たな古典演劇翻訳を提供するとともに、古典演劇に関する情報や知識を提供することで、「古典レパートリー演劇」の定着を促す。
○演劇実践者との交流や共同作業を通して「フランス古典演劇のレパートリー化プロジェクト」の新たな可能性を探る。

3. 研究の方法

フランス古典演劇を演劇実践から遠ざけているさまざまな問題を探り、それにひとつずつ解決策を見いだしていく。
○［翻訳の実践］演劇台本として使える日本語翻訳を生み出す。まずは18世紀フランスの喜劇作家マリヴォーの作品を選び、「笑いを生み出し得る翻訳であるかどうか」を翻訳の評価基準と設定することで、翻訳のあり方を考え直す（意味内容を訳そうとする翻訳では、おかしみを“理解す

る”ことはできても、観客の笑いを生み出すことはできないからである)。翻訳実践を通して、現代における演劇翻訳の方法論をつくり上げるとともに、その結果生まれた古典翻訳台本をインターネット上においてだれもが容易にアクセスできる形で提供する。また、完成した翻訳台本のリーディング等によって、フランス古典劇の面白さを広く伝えていく。そうした活動から生まれる人々のリアクションを翻訳実践にフィードバックさせる。

○[現代フランスにおける古典劇上演の調査・分析]古典劇がきわめて創造的な形で“生きて”いる現代フランスの演劇実践を多角的視点から調査する(レパートリーとプログラム、演出と演出家、演技と役者、古典の“現代化”と観客の古典受容の問題等々)。実際のパフォーマンスを数多く見ることが理想だが、年間3週間ほどのフランス滞在しかできないため(3年間を通しても2か月程度)、フランス国立図書館(BNF)に所蔵された(INA)演劇映像資料を活用する。また、パフォーマンス分析を翻訳実践に反映させる。すなわち、古典テクストの翻訳(文字の翻訳)を、パフォーマンスとしての古典テクストの翻訳(「テクストの身体」の翻訳)へとシフトする(翻訳原理そのものを検討し直す)。

○[演劇人・学校演劇部等との交流]演劇人とのフランス古典演劇勉強会・リーディングの会等さまざまな交流の場をつくり出す。高校生等を対象に古典劇翻訳をベースにワークショップを行う。

○[イターネットによる普及活動]インターネット上に翻訳を提供するにとどまらず、フランス古典演劇や現在のフランスの演劇に関する情報等を、ブログなども活用して広く提供する。

○大学の授業に古典劇翻訳をベースにしたリーディング・ワークショップを導入することで、教育プログラム・レベルでの利用の仕方を考える。

○「フランス古典演劇のレパートリー化プロジェクト」の趣旨に共感する人々のネットワークを構築する。

4. 研究成果

○18世紀フランスの喜劇作家マリヴォーの喜劇『コロニー』(*La Colonie*)と、同じくマリヴォーの喜劇『恋のサプライズ2』(*La Seconde surprise de l'amour*)の日本語翻訳台本を制作し、インターネットのホームページ“sanki's empty space”上に掲載した。これで、現在、同サイトには、2010年度以前にすでに掲載されていた『奴隷の島』(*L'Ile des esclaves*)を含めマリヴォーの喜劇3作品の日本語翻訳台本が掲載されており、だれもが自由にこれらの翻訳を読むことができる。これらの翻訳は、上演台本として用いられることを想定してつくられており、観客が一度耳から聞いただけですべての台詞を理解できるようになっているし、また、翻訳でも原文同様自然に笑いが生み出されるよう工夫されている。翻訳の方法論的には『恋のサプライズ2』の第3幕において一応の完成形を得たと思う。「翻案」ではなくあくまでも翻訳として、どこまで“自然”な日本語をつくり出せるかがポイントであり、意味内容だけではなく、言葉の流れやリズムをも翻訳の中に取り込もうとしたものである。抽象的な言い方をすれば、「テクストの身体」を翻訳する翻訳法の実践であり、その方法については、原文と比較しながらサイト上でだれでもが検証できるだろう。また、サイト掲載の翻訳には、上演あるいはリーディングをする際に役立つ注(“学術的”な注ではない)が多数付けてあり、またわかりやすい解説文なども添えてあり、マリヴォーに、あるいはフランス古典演劇に初めて触れる人々にも近づきやすいものとなっている。なお、『奴隷の島』等、『恋のサプライズ2』第3幕以前に翻訳掲載されていたものについては、方法論的視点から若干の修正が今後の作業として必要になるかもしれない。

○2010 年度、11 年度、12 年度とそれぞれ 3 週間前後パリに滞在し、「フランス演劇の現在」を観察することができた。観察は 2007 年以降年1回のパリ滞在という形で継続的に行っており、その成果とも合わせトータルで、貴重な情報収集とその分析を行うことができた。国立劇場を初めとするメジャーな劇場から、またプロジェクト的性格の強い公演から、“場末”のアマチュア的な演劇に至るまで、古典劇がいかに多様なレベルで繰り返し現代に再生しつづけているか(古典は一部のエリートの専有物でない)、また、さまざまな階層および年代の観客を引きつけているかを、実際の事例からダイレクトに確認することができ、「古典演劇のレパートリー化プロジェクト」を構築するための演劇的、文化的、さらには社会的モデルを得た。また、フランス古典演劇上演において、外国人(フランス人ではない)演出家が参加してすぐれた公演を実現していることも、日本におけるフランス古典演劇の普及に大いに参考になる。古典レパートリー化の重要なモデルであるオペラ公演においても、とりわけバロックオペラの領域で、斬新な演出、外国人演出家の参加、プロジェクト的な公演(コンフェランスや展示会などの同時進行)、ジャンルを超えた試み(人形演劇とのコラボレーション)、“サブカルチャー”の取り入れなど、“現代の演劇”という視点からの創造的活動が活発に行われ、日本に比べはるかに安い入場料設定により多くの観客を得ている。いわゆる古典ではない20世紀演劇もレパートリー化され、“現代化”されつづけている。コンテンポラリー演劇(いわゆる新作上演)受容への積極的な姿勢を示しながら(外国人作家、外国人劇団の受け入れにも貪欲である)、一方で、これほど豊穣な“古典”演劇活動を展開するフランス現代演劇は、オリジナル新作台本上演偏重の日本演劇を見直すための参考となるだろう。

○フランス国立図書館(la Bibliothèque nationale

de France)の映像資料アーカイブ(INA)において、過去の演劇公演の映像資料を調査・分析することができた。いまマリヴォーに限って言えば、ストレーレル演出の『奴隷の島』、ガリン・ストイエフ演出『愛と偶然の戯れ』、アントワーヌ・ヴィテーズ演出でミラノ・ピッコロ座による『愛の勝利』、パトリス・シェロー演出『贋の侍女』など、重要なマリヴォー公演/演出を見ることができた。短いパリ滞在で実際に見られる公演数は限られているので、映像アーカイブへのアクセスは非常に役に立つが、さらに、映像資料では一時停止等によるシーンごとの分析も可能になるので、研究上きわめて有効である。こうした分析は、上に述べた「テクストの身体」の翻訳、またそうした翻訳理論の構築にも役立った。文字として存在する古典テクストを文字としての古典翻訳に移し替えるのではなく、現代において上演/演出されるべきテクストとして、そこに潜在的に存在する身体パフォーマンスのさまざまな可能性を取り込みつつアクチュアルなものとして翻訳する(私たちは、演劇翻訳は明らかにひとつの“演出”であるという立場に立っている)という翻訳であり、翻訳理論である。また、こうした INA の演劇アーカイブは、日本においていま必要であると思われる演劇アーカイブづくりのひとつのモデルとなり得るものでもある。日本の若い演劇人、あるいは演劇に興味を抱く学生たちが、実際にフランスやヨーロッパの演劇公演を目にすることは容易ではなく、従って、演劇活動レベルで、また養成過程において、グローバルな視野や多様なレフェランスを持ちにくい、あるいは獲得しにくいということがある。そういう現在の日本の演劇環境にあって、ヨーロッパの演劇公演アーカイブ(映画におけるシネマテックのようなもの)に無料で、あるいはきわめて安価にアクセスできるとすれば、それは間違いなく日本の演劇活動を豊かなものにするだろう。

○翻訳台本『恋のサプライズ2』の一部を用い、高校生を対象とした2回のワークショップを行った。それぞれ独立したワークショップであり、連続したものではなく、また、こうした高校生のワークショップをシリーズ化するには至っていないが、この試みにより、“現代語訳”によるフランス古典喜劇が高校生に抵抗なく受け入れられることが確認された(翻訳台本は、現代の日本で“普通”に用いられる言葉で訳してあり、一種の“擬古文”的な訳文でつくられた既存の翻訳古典劇と比べれば“現代語訳”と呼び得るものである)。高校生たちは、この“現代語訳”台本を“演じる”ことによって、フランス古典喜劇の面白さを実際に体験することができた(ワークショップ後のアンケート等による)。また、こうしたワークショップを通して、高校生対象の古典劇ワークショップのノウハウをある程度つかむことができた。一方、高校の演劇部指導者たちといくつかのコンタクトをとったが、彼らのプログラムの中に“現代語訳”マリヴォーを組み込むといった段階には至っていない。フランス古典劇というものが演劇指導者にあまりにも知られておらず、その理解を得ることが容易ではないこと、高校演劇においてもオリジナル劇上演への強い傾向が見られること(指導者自身のオリジナル台本を演じるというケース)などが困難さの要因であったが、この領域においては、今後多くの指導者たちとのネットワークを広げていくことにより、新たな可能性が見いだせるものと思われる。なお、授業へのフランス古典劇ワークショップの導入方法などを「演劇を体験する――マリヴォー喜劇『恋のサプライズ２』に触れてみる」としてまとめた。

○2011 年度以降、大学(白百合女子大学)において、翻訳台本『恋のサプライズ2』第1幕を用い、ワークショップを取り入れた授業を行っている。教育プログラムとしてのフランス古典喜劇ワークショップの可能性を探るとともに、履修学生によるリーディング公演を目指している。現段階で、すでに開催された公演はないが、2013 年12月に地域の劇場においてリーディング公演を予定している(劇場側の了承はすでにとれている)。

○大学院博士課程(白百合女子大学)において、本研究をベースにした授業を2回行った。ひとつ目は、「エリック・ロメールとマリヴォー演劇」という論文にまとめたもので、エリック・ロメールの映画作品とマリヴォー喜劇の“近さ”を論じた。エリック・ロメールの映画作品は、現代のありふれた“普通”の枠組みの中で“普通”の現代語で演じられたマリヴォー喜劇という側面を持ち、マリヴォーのいわば現代バージョンである。その意味で、本研究で行っているマリヴォーの“現代語訳”とロメール作品の間にも、ある種の“近さ”がある。この論文については、その一部をブログ上にも掲載して、フランス古典喜劇の普及につとめた。ふたつ目は、古典劇翻訳の方法論をあつかったもので、これはまだ論文の形にまとめていない。授業では、既存のさまざまな古典劇翻訳を例として批判的にとり上げながら新たな翻訳の可能性を論じたが、論文の形では、既存翻訳批判ではない別な方法論展開の仕方を現在模索している。

○演出家・脚本家. 俳優など、多様な演劇人とともに「マリヴォー研究会」を 2011-2012 年の半年間にわたり定期的に開催した(月1回のペース)。これは、リーディング(やはり『恋のサプライズ2』を用いた)やディスカッションを通じて古典喜劇をその実践につなげようとする活動であった。参加者はリーディングに積極的な姿勢を示し、ディスカッションもきわめて活発に行われた。演劇に実際に携わる人々にフランス古典劇の面白さを体験してもらうという点で一定の成果が得られたと思う。しかし、参加した演劇人のひとり一人が自分たちの演劇活動の中にマリヴォー演劇を組み込むというようなレベルには至らなかった。自由参加という形式をとっていたので、講座料を支払って講座に参加する、ワークショップに参加す

るといった場合と違い、参加者は毎回出席する訳ではなく、「マリヴォー研究会」がいわば「マリヴォー体験会」以上のものになり得たかどうかは疑問が残る。こうした活動を通して、「フランス古典劇のレパートリー化プロジェクト」の内包する一種のパラドックスが見えてきた、と言えるのかもしれない。つまり、研究会なりワークショップなりに継続的に参加してもらうには、まず“現代語訳”古典劇の面白さをわかってもらわなくてはならないが、面白さをわかってもらうには継続的に研究会・ワークショップに参加してもらわなければならない、という矛盾である。あるいは、あちこちでリーディング公演などが開催されるような状況が生まれて初めて“現代語訳”マリヴォーの面白さを広くわかってもらえるようになるだろうが、まず面白さをわかってもらわないことには人が集まらず、リーディング公演等の開催が難しい、という問題である。もちろん、こうした問題も、今後人的ネットワークがさらに広がれば、新たな可能性が生まれるのだと思う。当面は、インターネット上に、より多くのフランス古典劇“現代語訳”を掲載し、いわば「クライアント」を惹きつけられる豊富な「メニュー」を充実させることが最重要課題であると言えるだろう。2013 年 12 月のリーディング公演開催も、これが成功すれば、フランス古典劇の宣伝・普及に一定の貢献ができるだろうし、また、例えば、公演を映像資料として見られるようにできるとすれば、「クライアント」に提供できる格好の「見本」となるであろう。翻訳の方法論が完成した現在、翻訳についてはこれまでよりもスピードアップが期待される。現在インターネット上での翻訳掲載を準備している作品は、マリヴォー『愛の勝利』、ラシーヌ『ベレニス』、コルネイユ『イリュージョン・コミック』などである。「フランス古典演劇のレパートリー化プロジェクト」の構築それ自体についてはいまだ道半ばと言えるかもしれないが、「障害となり得る諸問題」の調査・研究については十分な成果が得られたと考える。今後、プロジェクト構築へ向けてのプログラム整備を行いたい。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①酒井三喜、演劇を体験する――マリヴォー喜劇『恋のサプライズ２』に触れてみる、アウリオン叢書　別冊、査読無、1 巻、2011、pp119-142

②酒井三喜、エリック・ロメールとマリヴォー演劇、アウリオン叢書、査読無、8 巻、2010、pp131-151

〔その他〕
ホームページ等

http://www012.upp.so-net.ne.jp/sankis-es/

sanki's empty space

6. 研究組織

(1)研究代表者
酒井　三喜（SAKAI, Mitsuyoshi）
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号：70205714

(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし